２０２１年１２月５日（日）
＜待降節(アドベント)２主日礼拝)
宣教　『主が共におられる』
テキスト：ルカによる福音書１章２６～３８節

ローソクに灯が２本灯り、待降節・アドベント第２の週を迎えました。
今日の聖書の個所は受胎告知と呼ばれる有名な、乙女マリアに対する天使ガブリエルの神の子イエスをマリアが宿すとつげる場面です。
キリスト教の幼稚園、保育園でも毎年子どもたちが劇をします。誰がマリアを演じるのか、先生たちも苦労されます。
　私ごとですが、４０年ほど幼児施設でも働いて来ましたので、毎年クリスマス劇を観て来ましたが、いつもこどもの姿や表情が新鮮でした。
　この場面のエル・グレコの受胎告知の絵画は徳島の大塚国際美術館で陶板画で観ることができます。わたしが以前働いていた倉敷の大原美術館ににはその原画がありました。印象に残る絵画です。

26:六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。
　この六カ月目とは、今日の聖書個所の前に、洗礼者ヨハネを高齢者のエリサベトが身ごもったことが記されています。その事から６カ月目ということです。
　天使ガブリエル、神さまからの使いとみなされる存在です。聖書では、ガブリエルとか、ミカエルとか、ラファエルなどが有名です。
　ナザレと言う町は、ガリヤラ地方の小さな町です。
　このガリラヤ地方は、今から２０００前のユダヤの中心都市エルサレムからみれば地方でした。また「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と見下されていた地方でもあったようです。その地方の、かつ小さなナザレの地に、神の子イエスはお生まれになったのです。クリスマスの奇跡でもあると思えます。
　神さまが人の見逃す小さなものを見ておられる方であるという、神さまの深い愛を感じることができるのです。人々が忘れている、気づかない場所を見ておられるのです。わたしちも大切にしたと願います。
27:ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。マリアはカトリック教会では聖母マリアとして多くの信者の方々に慕われています。
　このおとめアリアの所へ天使ガブリエルは来ました。この時、マリアは１５、

6 歳ごろではなかったかとも言われます。その時、マリアはヨセフといいなずけの関係でした。またヨセフは、紀元前１０００頃イスラエルを統一したダビデ王の家系であったと言われています。ちなみに、この「マリア」は、ベブライ語では「ミリアム」と発音され、イスラエルの指導者モーセの姉のミリアムの名前と一緒で、当時よくあった名前です。本来ルカによる福音書を編集したルカは、マリアの名をギリシア語で記す時に、ヘブラ語の読み方でマリアムと記していますが、それがマリアとなります。

それはさておき、28:天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」

天使ガブリエルは、マリアに神からの祝福、喜びの知らせを知らせに来たのです。「おめでとう、恵まれた方。 主があなたと共におられる。」

栄光ある、全能の慈しみ深い神、主がマリアと共におられるとの呼びかけ、告知、知らせです。祝福のことばです。

これを聞いたマリアの心はどうだったでしょうか？

29:マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。　天使のことばに戸惑い、考え込んでしまうマリアでした。

理解できます。喜びの知らせは、マリアにとって戸惑いの知らせでもあったのです。わたしたちの場合でも、良い知らせは、聞いたその時は悪い知らせのように思えることもあるのです。

戸惑うおとめマリアに対して天使はすかさず、間髪入れずに、

30:すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。」と。

更に、

「31:あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。」と。イエスと言う名もマリア同様、当時よくあった名前で、旧約聖書では、ヨシュアと言われます。イエスという名前には「神は救いである」という意味があります。重ねて、天使ガブリエルは、マリアに

「32:その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。」と語りかけます。

33:彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」と。

「ヤコブの家」とは、イスラエル民族ないしその国家のことだと言われます。

神は生まれて来るイエスにダビデの王座と支配を与えられるとの約束です。凄いこと、すばらしい知らせなのですが、マリアには、受け入れがたいことだったようです。受け入れる、信じるということは、大変なことなのだとつくづく思います。神とイエスを信じることは、自分の知識や経験を超えた飛躍が必

要です。哲学者であり、信仰者であったパスカルは「信仰とはかけである。」と言いました。わたしたちも、神とイエスに自分をかけるのです。これが間違いではないことは、代々の信仰者たちが証し、教えてくれています。
34:マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」　マリアの言葉は、事実であり、常識であり、当然なことです。
　しかし、天使ガブリエルは、そのことを承知でそれを超えて語りかけて行きます。
35:天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。
　だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。
36:あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。
　聖霊があなたに降り、神の力があなたに注がれる。37:神にできないことは何一つない。」
天使ガブリエルは、事実、常識を承知の上で、語るのです。
ここでガブリエルは、一般的な常識を語っているのではないのです。
神の秘密、特別なこと、1 回だけ起こることを告げているのです。処女降誕の出来事の根本は、聖霊の働き、神の力によるものだということなのです。
ガリヤラ地方､ナザレの町の乙女マリアを神の子イエスの母として選ぶという、神さまの熱い深い愛を思わざるを得ません。
　「愛は常識を超える」と言われます。天地を創造された神は、無から有を造られる方なのです。たとえ悪がはびこる中にも善を行なわれる、処女降誕は、神が全能、神は最善を成される方であり、万事を益としてくださる方、闇の中に光を造られる方なのです。ここに真の希望があります。神は信じる者たちの希望の力なのです。たとえ周りが寒くなっても希望の火は消えないのです。
　旧約聖書の創世記冒頭の言葉を思い出します。創世記 1 章 1 節～3 節（p1）「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた、「光あれ。」こうして、光があった。」
　　マリアは､戸惑いと苦悩の中､それを超えて､闇の中にまことの光を見て､遂に、愛なる神に自分を捧げる決心をしたのです。
　　神さまのこの世に対する愛の働きがなされるために、誰から強いられてでもなく、自分に与えてられている自由な思いの中で、自分に備えられた道を受けいれたのです。
　38:マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に

成りますように。」そこで、天使は去って行った。
　マリアはこれから先、世間の信用を失い、罪の女として石打ちの刑にされる可能性もありましたが、それを受けとめつつ、なお神を信じより頼む決心をしました。これが神がマリアに与えられた信仰から来る決断でした。
　それゆえ、わたしたちは、祈ります。「マリアは歩みぬ、キリエエレイソン。」「主よ、マリアを憐れみたまえ！」と。
　主の平安を祈ります。

◆イエスの誕生が予告される

26:六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。
27:ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。
28:天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」
29:マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。
30:すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。
31:あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。
32:その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。
33:彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」
34:マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」
35:天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。
36:あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。
37:神にできないことは何一つない。」
38:マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。